
ワイルドサンタ ～ 聖夜の奇跡～

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワイルドサンタ 〜聖夜の奇跡〜

【Nコード】

N6357Q

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

グリーンランドにあると云われる、クリスマス・タウンの外れの雪原に、1人の青年が住んでいた。

祖父の跡を継ぎ、サンタクロースとなつて6年目の冬。サンタの元へ毎年のように世界中の子供達からの手紙がやってくる。

クリスマスまであと3日と迫ったある日、サンタの元へ遅れて1通の手紙が送られて来た。そこに書かれていたのは1人の少女の願いだった。

しかしサンタはその願いを叶えてやる事が出来ないと悩んだ末、あ

る結論を出しそれを実行する。サントが読んだ少女からの手紙に書かれていた願いとは？

去年（2010年）の12月24日にアップしたのですが、誤って消してしまった為再投稿です。申し訳ありません。

12月1日（前書き）

この作品はフィクションです。

サンタクロースという存在に対して、絶対的な理想像をお持ちの方は閲覧をご遠慮なさることをオススメしておきます。

もしくは、サンタクロースの一形態としてお楽しみください。

12月1日

—— 12月1日。

空からの贈り物。

景色を白く染め上げる雪によって、辺りは一面銀世界となっていた。

街の灯りから少しばかり離れた雪原。木がまばらに生えるだけの、多少殺風景な雪の平原に一軒のログハウスが建っている。木の温もりを感じさせる丸太組みの家。テラスには丸テーブルが置かれ、中央には陶器で出来たスノーマンが飾られている。

その敷地面積は広く、ハウスは3階建てでかなりの大きさだ。馬でも飼っているのだろうか、すこし離れた所には、茶色の塗装が所々剥げている、家に比べると小さな小屋が建っていた。

それにしても不可思議な光景が目映る。家のすぐ目の前には巨大なボックスが地中に埋め込まれており、これだけ雪が積もっているというのにも関わらず、その上に雪は積もっておらず、箱の蓋が地上に顔を出していた。柵の浮き彫りが綺麗に着色され、装飾されたその豪華な蓋には、大きく斜めに『Christmas Letter Box』と書かれている。

家側の箱の手前には、いくつものスイッチがついた大型の電子パネルのようなものが設置され、液晶には「520,816,207」という数字が表示されていた。

朝焼けに照らされ雪原が朱に染まる。太陽が東から昇り始め、鳥たちが朝を知らせる時間帯。

すると突然、ログハウスの玄関のドアが音をたて勢いよく開け放たれる。

中から出てきたのは、20代前半くらいの青年だった。180cm程の身長に、ちよつぱり悪戯好きそうでいて野性味のある、でも端正な顔立ちをしていて、その金色の髪は短くカットされていた。鮮やかな碧眼は、まるで海のような美しい深い青色をしている。

まじめな顔をしていれば“カッコイ”と言えるのだろうが、とても気怠そうな……と言うよりは、とても面倒くさそうな表情^{かお}をしている。

彼は寝癖のついた頭をポリポリと掻きながら、やる気のない足取りで階段下にあるポスト……のような巨大な箱へと歩いていく。

しばらくの間目を細め電子パネルを眺めていたが、箱のすぐ隣に設置されている普通サイズのポストへと視線を移すと、その蓋を徐に開けた。そして中から新聞紙を取り出して、巨大な箱へとまた視線を移す。

2度、3度と瞬きをし、まるで見なかったことのように、彼はハウスへと足早に帰っていった。

——それから数分後。

先程のように勢いよくドアが開くと——。

「だぁーっ！ 何なんだよ、あの数は……！」

……何故だか分からないが、キレている様子。

頭には、先程はなかった星の柄が散りばめられたナイトキャップを被っている。どうやら寝る気だったみたいだ。

そのまま階段下まで歩いてくると、電子パネルに表示された数字を読み解く。

「はぁ……。この時期になると毎年大変過ぎて敵わんな……。なんだこの手紙の量は」

数字を一桁ずつ読んでいき、そのあまりの多さに肩を落としうんざりとした顔をする。手元のパネルを操作してほんの少しだけ蓋を開いてみる。

ちらりと覗く箱の中には、いろいろな形をした手紙が溢れんばかりに納められていた。差出人と住所を見ると、様々な言語で書かれているのが分かる。世界中からこの青年に宛てられた手紙なのだから、当然と言えば当然なのだが……。

何を隠そうこの青年。こう見えても、立派なサンタクロースなのである。

恰幅のいい体格に豊かに蓄えられた長い髭、優しい笑みを湛えた老人といったイメージとは程遠い、粗野で乱暴そうなこの青年がサンタクロースとは、いったい誰が初対面で気付くだろうか。

「これ全部俺が読むのか？ ……てか去年より多くないか？」

去年がどれ程であったかは知らないが、目の前の箱の中はとてつもない数の手紙で埋め尽くされていた。

「いや待てよ。いつその事、街の連中に手伝ってもらった方が……。いや、わざわざここまで来て貰うのも悪いな。どうすりゃいいんだ」

しゃがみ込みレターボックスに手を差し入れ、手紙を拾い上げては戻し、また拾い上げては戻し。悩んだ末にある結論へと至った。

「そうだ！ 毎年英語の手紙が多いからな。ドイツ語と英語はルドルフにでも読ませればいいかつ！」

悪戯な笑みを浮かべながら離れの小屋を見るサンタクロース。ルドルフと言うのは、このサンタクロースの飼っているトナカイのこ

とである。

「よし。そうと決まれば、とつとと分けるか！」

電子パネルまで戻ると、ボタンを操作し開いた蓋をいったん閉める。そして言語別の仕分けボタンを押した瞬間、箱の中が騒がしく動き出した。

液晶パネルには、『ただ今、手紙の仕分け中。今しばらくお待ちください』と表示されている。

待つことおよそ10分。ようやく騒音が鳴り止み静かになると、チンツ、と音がして仕分けの終了を知らせる。サンタが開閉ボタンを押すと、巨大な箱の蓋は少しずつ開きその中身を露にした。

各言語別に分けられた手紙は白い袋に入れられており、袋の表には分かりやすいように言語名が書かれていた。中でも英語の袋は、他の袋よりも圧倒的に膨らんでいる。ドイツ語と合わせると、それはもつとてつもない数だ。

「……キレられるかな？ でもまあいいか！」

英語とドイツ語の袋を箱から取り出し肩に担ぐと、彼は小屋へ向かって歩き出す。1歩、また1歩と歩を進めるが、雪が太ももの辺りまで積もっているため、なかなか思うように前に進めない。サンタは雪を足で挟りながら進んでいく。

そうしてようやく厩舎の扉の前まで来ると、彼は一度深呼吸をし、勢いよくその扉を蹴り開けた。

「ルドルフー、仕事だぞー！ つて……あれ？」

いつもなら、柵の内側に敷かれた藁の上で寝ているはずのルドルフの姿がそこにはなかった。彼はふと奥を見やると、木で作られた

朱塗りのソリの座席に蠢く物体がいることに気付いた。

「……おい、ルドルフ。てめえ、そこは俺の席だっつってんだろ！」
「ッ!？」

主人の怒鳴り声にびっくりしたのか、突然ルドルフは飛び起きた。まだ寝ぼけているのか、辺りを何度もキョロキョロと見渡す。そして入口に主人の姿を見つけたルドルフは慌ててソリから降りると、自分の寢床まで急いで戻る。

「主人が起きてんのに、いつまでも寝てるトナカイがどこにいるんだよ!」

「……………」

「なに、ここにいるだ? やかましい! ほれ、お前の仕事だ。今月は忙しいからな、今年は2カ国語を担当してもらう」

サンタはルドルフの目の前に手紙の入った袋を放り投げると、その言葉を聞いたルドルフがあらさまに嫌そうな顔をした。それもそのはず。英語は国際共通語のため、実質的にはサンタよりも手紙の数が大幅に増えることになるからだ。英語とドイツ語の袋、そしてサンタを、まるでトライアングルをなぞる様に見た後、主人を恨めしそうに見るルドルフ。

「ああん? んだ、その顔は。……あ、分かった。そうか、そういうことかー」

「ッ!? ……………」

次に何を言われるのかを察知したルドルフは、サンタの意味深な言葉にオロオロしている。

「いやーホントーに助かるよー、ルドルフ君。君のケーキ代も結構バカにならないからねー」

「ッ!？」

ルドルフはイヤイヤと首を大きく横に振り、主人へと抗議している。

「せっかく、これが終わったら特大XLサイズのケーキを食わせてやろうと思ったのに、残念だな」

XLサイズと聞いて、ルドルフはサンタにひしと抱きつき、涙目で訴えかける。その様子を見て、してやったり、と口元を少し吊り上げると彼は表情を呆れ顔へと戻す。

「……はあ。分かった分かった。んじゃ俺が戻ってくるまでに全部読んどけよ。あとでプレゼントの内容と住所を聞きにくるからな」

主人の言葉に安心したルドルフは、手紙の入った袋へと走っていく。

「よしよし。んじゃ俺も手紙を読みに戻るか。ルドルフ、ちゃんとやれよ————っておい、そこは俺の席だっつんだよ!」

「ッ!？」

「——ったく」

ルドルフがまたしてもソリに座ろうとしたのを一喝すると、サンタは呆れた様子で厩舎小屋を後にする。

ログハウスへと帰ってきた彼は、ナイトキャップを外し、リビングのテーブルの上に山の様に手紙を積むと、さっそくメモ帳を取り出し作業に取り掛かった。

「さて、始めるか！」

手紙を開けては中を読み進めていくサンタクロース。そこには、子供たちの心からの願い事が書かれている。サンタへの挨拶から始まり、自分の欲しい物をお願い……中には、明らかに親が欲しいと思われる物まで願いとして記されていたがその部分は無視だ。

「なになに、おままごとセット……。こっちはブリキのおもちや。……ミニカーに……お人形」

子供たちの欲しい物と住所を、メモ帳へ手際よく書き留めていく。読まれた手紙はリビングの床へと乱雑に次々に投げられ、辺りに散乱していった。

そうして深夜の2時過ぎ……。

「今日はこの辺にしよう。……ね、眠い。睡魔には勝てんぞ」

テーブル脇に置かれたナイトキャップを被り、サンタは倒れるように眠りに就いた。

12月1日（後書き）

昨年の12月24日に公開したのですが、不手際で誤って消してしまつたため、再投稿です。
申し訳ありません。

12月2日

——翌日。

「ふわぁあゝあ。っとー……眠い。今何時だ？」

サンタは一度大きくあくびをすると、半開きの眼で壁に掛けられている古めかしい時計を確認する。

「……なに！？ まだ6時じゃねーか。たった4時間。……もう少し寝られると思ったのによ」

彼が愚痴った丁度その時、客人を知らせるベルが突然鳴り響いた。

「な、なんだ？ こんな時間にいったい誰だよ」

連続して何度も鳴らされるベルにイライラしながらも、玄関に向かいサンタクロースは扉を開ける。

「やつほー！ おっはよー」

朝も早くだというのに、満面の笑みで手を振っている女がそこにいた。アンナだ。肩まで伸びたセミロングの髪は赤茶色。活発で意思の強そうな瞳は大きく、小顔でとても可愛らしい顔立ちをしている。

アンナはサンタクロースの幼馴染で、昔から何かと世話を焼いていた。実家が洋菓子店ということもあり、彼にとってはありがたい存在なのだが——。

「帰れ、俺は寝る。じゃな！」

イライラも相まってか、きつく言い放ち扉を閉めようとしたその時――

「ちょろっと待った〜！」

アンナは足で扉を押さえつけ、それ以上扉を閉まらなくする。

「なにすんだよ！ 寝るつつってんだろ！」

「あのね！ あんたに頼まれたもん持ってきたのに、その言い草はないでしょ〜！」

「ん？ ……俺なにか頼んだっけ？」

「……え？ ……覚えて、ないの？」

腕を組み、何かを思い出そうとするサンタクロース。首を傾げうんと唸ってみるも、頼んだ物の正体が何か思い出せないようだ。

「これよこれ。ケーキ。あんた昨日の夜にＬＬサイズのケーキ注文したでしょ？」

そういつてアンナは、ケーキの入った箱を持ち上げてサンタクロースに見せる。

「ケーキ……あゝ、そう言えば。……って、え？ 　ＬＬ？ 　ＸＬじやなかったか？！」

「えっ？ ……ＬＬって言ってたけど」

「げっ！ しまった！ ルドルフがキレるかも……」

彼はどうやらサイズを間違えて注文してしまったらしい。顔を引きつらせてアンナを見返す。

「……あのトナカイ、まだケーキ食べてるの？」

彼女は厩舎の方を見やると、視線をサンタへ戻し呆れ顔で言った。

「まだって言うか、ケーキしか食べねえよ」

「ヘンなトナカイね」

「……否定はしねえよ」

2人揃ってケーキの箱を見つめる。すると彼は開き直ったような素振りで話を続けた。

「まあ、サンタのトナカイは変わりもんだからな。ところで用事はこれだけか？」

「あつ、そうそう。これもついでに持ってけて、お母さんが」

アンナは肩にかけていた袋から風呂敷包みを取り出すと、なにやら鼻腔をくすぐる良い香りが立ち上った。

「まさか弁当！　そういや昨日の昼からなんにも食ってねえからよ、ちよつど腹減ってたところなんだ。よし、上げれ上げれ」

「それじゃ、おじゃまします」

サンタはアンナを家に上げると、そのままリビングへと通す。

扉を開けた彼に続いてリビングへと足を踏み入れたアンナは啞然とした。リビングの床は手紙で溢れかえっており、散らかされた部屋を見た彼女は呆れた顔をしてサンタに言った。

「相つ変わらず散らかってんのね」

「しょうがねえだろ、これはよ。つうか去年より多いんだぜ？これ」

改めて手紙の多さを実感したサンタクロースは、ガックリと肩を落としてうな垂れている。

「お弁当置く場所、ないね」

「下で食べるか！ 広げてよ」

「……そだね」

アンナは風呂敷を広げ座るスペースを確保すると、持ってきた弁当箱を開けて準備をする。

色とりどりに飾られた中身はとても可愛いものだった。

「なんか昔の遠足みたいだな！ ってあれ？ 今日のはなんか、妙に可愛いな」

「そ、そうかな？」

「おばさんもこんなの作るんだな。んじやいっただっきまーっす」

ひょいと玉子焼きをつまみ上げ、口の中に放ったサンタクロースはそのとてつもない味に驚愕した。

「からー！！ なんだこれ、塩の味しかしねーぞ」

「えっ！ うそ！？」

彼女はそんなはずないと言った表情で、サンタが今しがた食べた玉子焼きをフォークで突き刺し、一口かじる。その瞬間、アンナの舌に広がったのは卵の味ではなく、ただ単に辛いだけの塩味だけだった。

「……ごめん、入れるの間違えちゃった」

アンナは玉子焼きを突き刺したままのフォークを持ち彼へ謝る。

「これ、まさかお前が作ったのか？」

「あっ?!」

サンタにそう聞かれ、アンナはまずったという顔をした。自分が朝早く起きて作ったことを内緒にし、母親が作ったことにしようとした照れ隠しが彼にばれてしまったのだ。

アンナは顔を赤くして恥ずかしそうに俯いた。

「まったく、慣れねえことするからだ。おばさんに頼めばよかったのよ」

彼の心無い一言を聞いたアンナは俯いたまま拳を握り、ゆっくりと顔を上げるとその目には薄っすらと涙が浮かんでいた。徐々に目を潤す水分が増えて今にも零れ落ちそうな涙を堪え、アンナはキツとサンタを睨むと声を張り上げる。

「なによそれ! あんたの為に作ってきたのに……、もう知らないっ!」

弁当箱をリビングに残したまま、アンナは走って家から出て行った。あまりの迫力にも何も言えず、彼はただ呆然とその後ろ姿を見送ることしか出来なかった。

「なんだよあいつ。てかこれ、俺が食うのか? ……」

他の品を一通り見て、サンタは少し苦い顔をした。

またさっきの玉子焼きのような味だったかどうか。意を決して次はフライドチキンに手を伸ばした。見た目は普通の骨付きフライドチキン。衣は美味しそうな狐色に揚がり、噛めばカリッとした食感がするであろうことは、見た目からもすぐに伝わってくる。香りもまあスパイスが効いていて悪くない。問題は味。

彼は思い切ってチキンの真ん中に噛り付いた。目を閉じてその味に集中し、ゆっくりと咀嚼そしゃくしていく。

「あれ、普通に美味しいな」

食べたチキンはいたって普通で、玉子焼きのような刺激的な味ではなかった。他の品々も食べてみたところ、特に変わった味はしなかった。

「なんだ、玉子焼きだけ失敗したのか。それにしても泣くなんて、大げさな奴だな」

彼は弁当箱を持って立ち上がると窓の外を見る。もうアンナの姿はどこにも見当たらない。既に家にも帰って店を手伝っている頃だろうか。サンタは手と口を動かしながら、雪の降る雪原を眺めていた。

「うん、まあまあ美味しいじゃねえか」

いないアンナに向かって1人呟く。彼は心の中でアンナに感謝しつつ、残りの弁当を一人寂しく食べ進めるのだった。

そうして10分程が経ち、どうにか弁当を平らげたサンタは、箱を適当に風呂敷で包みテーブルの角に置く。そしてそのままクロゼットの前まで歩いていくと、その扉を左右に開き、中から人型の

ハンガーに掛けられたサンタスーツ一式を取り出した。

「弁当箱返さなきゃな。あゝめんどくせ。でもこいつ着てかねえと寒いしな」

ぶつぶつと文句を言いながら、彼は暖炉の前まで行くとパジャマを脱ぎ始める。

パジャマの上からでは分からなかったが、その肉体は引き締まり、筋骨隆々とまではいかないが程よい筋肉がついていた。いわゆる細マッチョな体系だ。

パジャマを脱ぎ終わった彼はサンタスーツへと着替えていく。

まず黒の長袖インナーシャツを着る。そして赤のスラックスを履き、次に赤のスーツをインナーの上に着た。赤い生地のスーツは左肩口から黒のラインが入り、黒のベルトと交わることで十字を表している。手首と裾、襟元はモコモコとしたファーのようなものが付いていて、それはスラックスの足首にも付いていた。スーツの裾の位置は股下あたりで、丈が若干長めに作られているようだ。

黒の靴下を履き準備が整ったサンタは、最後にハンガーの頭部分からサンタ帽を取り外すとそれを被る。円錐状のナイトキャップは上下に長く、その先には毛で作られたポンポンが付いていた。

準備を終えたサンタは机の風呂敷を手にとると、そのまま玄関へ歩いていく。玄関の壁に設置されたシューズボックスの扉を開け、中から黒のブーツを取り出すとそれを無造作に床に放り、サンタはスリッパをブーツに履きかえた。

ドアを開けて外へ出たサンタは、一度厩舎を見やる。

「ルドルフの邪魔するのも悪いし、しゃあねえ。街までは歩いていくか」

彼は降る雪により、灯りがぼやけて見える街の方角を見て歩き出す。階段を下りると巨大なレターボックスの脇を通って道路へ出た。クリスマスレターを届けに来る郵便屋の車には除雪機能が付いているため、街へと続く道路の雪は脇に除けられていた。早朝に来てしばらく雪が降っていたためか、轍^{わだち}には薄っすらと雪化粧されている。

街へと続く1本道。その轍には1往復分の足跡が残されていた。家へと続く足跡は歩幅が狭く、街へと続く足跡は歩幅が広い。アナは相当怒った様子だったのできつと全速で走って帰ったのだろう。彼はその足跡を辿る様に、1歩1歩地面を踏みしめて歩く。寂しかった風景も街が近付くにつれ、徐々に明るさと暖かさを感じさせるものへと移り変わっていった。

12月2日 (2)

クリスマス・タウン。

その名の通り年中クリスマスなこの街は、グリーンランドの雪原に設けられた異空間。この街とサンタの住む雪原まで展開されている。この中では人々の他にスノーマンなども暮らしており、クリスマス・タウンの出入には、ここで作られた懐中時計が通行章としての役割を持っている。

石畳の道路を挟むように家々が立ち並び、街灯はやわらかくオレンジの光で街を照らす。まだ朝の6時だと言うのに、この街のある一角に煌々と明りを漏らす窓があった。

歩いていくと見えてきたのは、格子状の窓から覗く棚。そこには様々な形をしたクッキーが袋詰めされて陳列されていた。入口の脇には立て看板が設置され、今日のオススメメニューが手書きで書かれている。

今日のオススメは『チョコレートタルト』と『イチゴのミルフィーユ』だそうだ。太字で書かれたそれはカラフルにデコレーションされ、それぞれの絵が温か味のあるタッチで描かれ、とてもポップな印象を受ける。

店の入口の大本看板には『No?1』と書かれていた。ここがアナの実家兼洋菓子店だ。

外観はレンガ調の造りで、屋根に大きな煙突が付けられているのが特徴的。一階は洋菓子店とカフェを兼ねており、ここで購入したケーキを店内で食べることも出来る。

ケーキはもちろんのこと、ここの紅茶とコーヒーはとてもおいしいと街でも評判で、休日ともなると寒い中行列が出来るほどだ。そ

んなこともあつてか、仕込みやスイーツ作りに朝早くから精を出して働いている。

色々世話焼いてくれるのはサンタがアンナの幼馴染でもあるからだろが、それ以前からここの洋菓子店とサンタクロースは馴染み深い。

手紙の読了までに時間がかかる忙しいサンタクロースへと、昔からよく弁当を作つて届けてくれていた。それが今でも続いている、ある意味腐れ縁なのだ。

今までのサンタクロースのトナカイにも、ルドルフのような変わり者が恐らくいただろう。それ故にこの店は、今のサンタにとって特になくはない存在だ。

彼は手にした風呂敷を一度見て、大きなクリスマスリースの掛けられた扉を開け店内へと足を運び入れる。扉が閉まると同時に、リースに掛けられた鈴が揺れてカランカランと鳴った。

店内に入ってまず気付いたのは香り。洋菓子独特の芳香が鼻腔をくすぐり、それに混じつて洋酒の香りが運ばれてくる。

サンタは目を閉じ、大きく鼻から息を吸つて肺に香りを目いっぱい送り込み、そして息を吐いた。脳を直接浸潤するような甘美な香りにクラクラしながらも、踏みとどまり彼は辺りを見渡す。

目の前には大きな冷蔵ショーケースが置かれており、既に中は数十種類のドルチェが所狭しと並べられていた。ケーキはもちろん、プリンやムース、タルトなど、色鮮やかな品々は見ていて空気が来ない。

ライトに照らされたショーケース内のケーキたちは、自己主張をし美を競い合うかのように立ち並んでいて、まるで宝石のように輝いている。

次に彼は左を見る。店内左奥の壁には棚が設置され、ここでは主に焼き菓子の包装されたものが売られていた。クッキーにビスケット、パウンドケーキやカステラなどだ。他にはチョコレートやキャンディなんかもここに置いてある。

そしてこの店の特徴の1つでもあるのが店内右奥。屋内スペースには、白と黒を基調としたシックなデザインのカフェテーブルと椅子が置かれ、屋外スペースには街路に面し歩道にせり出す形で、木の温もりを感じさせるモダンなテーブルや椅子が置かれている。

晴れた休日には、テラス席は沢山の人がで埋まる。友達だったり家族だったり、恋人だったり。

様々な人々がそれぞれの話題で談笑する。幅広い年齢層から愛される、ここはそんな店だ。アットホーム的な雰囲気も受けている理由の1つだろう。

つい先ほどから、厨房からはけたたましい音が誰も居ない静かな店内へと響いてくるようになった。金属が互いに擦れるような音。きっとボウルに入れた生クリームが何かを、ハンドミキサーで攪拌しているのだろう。

サンタはショーケース横に置かれたレジスターへ歩いていくと、その隣に置かれたプッシュ式の呼び鈴のボタンを押した。まるで教会の鐘のように前後に揺れる釣鐘状の呼び鈴は、ガラーンゴローンと音をたてて、奥で作業をしている者達へ客の来店を知らせる。

少しして厨房の方からやってきたのは、アンナの母親だった。40代とは思えない程見た目に若く、綺麗というよりはどちらかと言うと可愛らしい印象を受ける女性だ。

アンナと似たような栗色の短い髪、目はパッチリとして、優しい笑みを浮かべてサンタのもとへと歩いてくる。

「こんにちは！ ベッツィおばさん」

「あら、クリフ君じゃない」

「おばさん、今はサンタクロースだよ」

「あらそうだったわね、ふふっ。ところで今日はどうしたの、サンタさん？ またルドルフのケーキ？」

そう言うつとベッツィはクスクスと笑って、レジの下から注文用紙を取り出すと彼に手渡そうとする。

「いや違うんだ。弁当箱返しに来たんだよ」

首を横に振り、サンタは持っていた風呂敷をベッツィへ差し出すと、まあ、と言って彼女は風呂敷を受け取った。

「わざわざこの為に来てくれたの？ 連絡くれればあの子に取りに行かせたのに」

「いや、俺もアンナに悪いこと言っちゃったからさ……」

「そう言えばあの子怒ってたわね。なんでかしら。……呼んで来ようか？」

「いいよいいよ。あいつも手伝いで忙しいだろ？」

厨房からはハンドミキサーで攪拌する音が聞こえてくる。彼が来ている事に気付いているのだろうか、掻き混ぜる音はなんだか荒々しい。

「そうみたいね」

「あ、そうそうアンナに伝えて欲しいんだ。“弁当まあまあ美味かった”って」

サンタは、まあまあ美味かった、その部分だけを殊更強調するよ「いっけい」うに厨房奥へ向かって言葉を発した。

すると金属が落ちてぶつかっただような音がする。どうやら調理台の上にボウルを叩き付けた音だったみたいだ。アンナは“まあまあ”という感想が気に入らなかった様子。

先ほどよりも更に激しく攪拌しては、父親に混ぜすぎだと怒られているのが店内へ聞こえてくる。

それを聞いたベッツィは苦笑いしていた。

「そろそろ戻って手紙読まなきゃなんねえからさ、俺、帰るよ」

急ぎの用事がまだ山ほど残っているため、サンタはお暇を^{いとま}ベッツィに告げる。

「そう。なら今度時間が出来たら、ゆつくりとお店にケーキでも食べに来てね。アンナに接客させるから」

ベッツィはパチリとウインクするとひらひらと手を振った。

「まあ期待せずに楽しみにしとくよ」

彼は踵を返して店の出入口へ向かい歩いていく。扉のすぐ前まで来ると、何かを思い立ったように振り返り、

「砂糖と塩は間違えんなよー!!」

と大きな声でアンナに向かって声を掛けた。すると厨房からは「うるさい!」と怒鳴るアンナの声が返ってくる。ベッツィはその2人のやり取りを聞いて、アンナが怒っていた理由、とその時の光景が一瞬で目に浮かんだようだ。ふふっ、と笑いながらサンタを見ると、彼も口角を上げてベッツィを見返す。笑い合った後、サンタは店に別れを告げてその場を後にした。

街へ出てみると、さっきまで降っていた雪は止み、雲間からは太陽が顔を覗かせている。

街の様子も段々目覚めつつあるようだ。外へ出て雪かきをする者、仕事へ向かう者、はたまた『No?』に向かう者。

通り過ぎる人々がサンタに挨拶をする。「今年も大変だな」「頑張つてねサンタさん」。それに彼も返事を返す。「まあ適当にやるさ」「ありがとよ」。街へ来るといつもこんな感じだ。

微風だった冷たい風は急に強まり雲を動かす。射していた陽の光が雲に遮られ、再び灰色の雲が一面を覆った。またいつ雪が降らないとも限らない、そう思った彼は急いでハウスへと駆け出した――。

街から戻ったサンタはログハウスの扉を開けて中に入る。ブーツを脱ぎ、帽子を外す。そしてリビングへ向かう間にスーツを脱ぎにかかる。リビングへ入ると黒のレザーソファに掛けておいたパジャマを手に暖炉の前へ。

「ううゝさつび」

サンタはパジャマに着替え終えると、サンタスーツを人型ハンガーに掛け直してクローゼットに戻す。クローゼットの扉を閉めると、彼はおもむろにテーブルを見やる。

未だ片付いていないテーブルの上に山積みされた手紙。そしてテーブル脇に置かれたいくつもの袋に、床に散乱する手紙たち。彼はうな垂れたため息を吐き、肩を落しながらテーブルに戻った。

「ルドルフはちゃんとやってんだろうな？」

椅子に腰掛けたサンタは厩舎のある方角を見る。しばらく見つめ、

顔をしかめた後、再び手紙を開きメモをとる作業に移った。

それから数時間が経ち、腹の虫が鳴りようやく自分が空腹状態にあると気付いたサンタは、いったん作業を中断し夕食の準備に取り掛かった。

キッチンへ赴くと、冷蔵庫の野菜室からブロッコリーを一株取り出す。そして鍋に水を張りIHクッキングヒーターの上に置くとスィッチを入れた。

しばらくすると鍋の湯はコポコポと音をたて、小さかった気泡は少しずつ大きくなる。そこへ塩を少々加えると、泡は一気に勢いを増して沸騰した。ゴポゴポと鍋から溢れんばかりに沸騰を続ける湯の中へ、サンタは冷蔵庫から出したブロッコリーを適当に投げ込んだ。ボチャンツという音と共にブロッコリーは鍋に沈み、中でころころと転がる。

タイマーをセットし、ブロッコリーが茹で上がる2分程の間に、彼は次の品の用意にかかった。

システムキッチンに備え付けられた棚から『絶品！ 素敵なお味。おいしいコーンポタージュ』と書かれた箱を取り出すと、切り取り線に沿って箱を破り、中から粉末を個別に包装した袋を取り出した。食器棚から陶器の器を出して、袋を破り粉末を入れる。その中へポットのお湯を目分量で200cc程入れた後、手早くスープの素を掻き混ぜる。

そうしている間にセットしたタイマーが鳴り、ブロッコリーの湯で上がりを知らせた。IHのスイッチを切り、湯から茎を出すブロッコリーを鍋から引き上げると皿の上に置き、コーンポタージュと共にソファアの前のラウンドテーブルへと運ぶ。

キッチンへまた戻ると冷蔵庫からマヨネーズを出し、食器棚の引

き出しからはスプーンを取り出す。そしてテーブルへの戻り際に、パンがごからフランスパンを一本引き抜いた。

サンタはテーブルに戻る間にそのままパンを齧^{かじ}る。円卓へ付くとブロッコリー目掛けてマヨネーズを発射した。踊るようにうねりながら飛んでいくマヨネーズは、ブロッコリーの森のような緑色の花^か蕾^{らゐ}を多い尽くす。

茎を持ち豪快にブロッコリーにかぶり付き、パンを齧^{かじ}ってはスプで流し込む。この季節の彼はいつもこんな感じの忙しない食事を取っている。アンナが弁当を持ってくる時は例外だが……。

12月2日 (3)

やがて食事を終えたサンタはふとあることに気付く。

「俺が食ってるのに、あいつには飯なしつつうのもなんか悪いな。サンタクロースのトナカイはひと月なにも食わなくても生きていけるとはいえ……」

食器を片付け終えた青年は冷蔵庫を見る。そして中を開け、アナが持ってきたししサイズのケーキの箱を取り出した。

「なんだかんだ反発しても、あいつもやる時はちゃんとやってくれるし……しゃーねえ、持って行ってやるか」

冷蔵庫の扉を閉めると、彼は箱を持ってそのまま外へと出て行った。

外の風は冷たく吹き荒び、雪原にまばらに生える葉の枯れ落ちた裸の木が、寒そうにその枝を震わせている。

サンタは身震いしながら厩舎へと近付いていく。腰まで隠れるくらいに積もった雪がその進行を遅らせるが、構わず雪を蹴りながら進んだ。

ようやく辿り着いた厩舎の扉を、バランスを崩しながらもいつものように蹴り開けた。

「ルドルフー！ 飯だぞー……」

昨日の様に、ルドルフがソリの上に座っているのではないかと思いい、あらかじめそちらへ視線を向けていたが、見つけた物体を見て

啞然とした。

案の定、ルドルフはソリに腰掛けて胡坐をかき、腕を組んで舟を漕いでいたのだ。ソリの脇にはまだ開けていないであろう手紙の入った袋が置かれている。

「ル、ルドルフー!!」

主人の焦りを孕んだ怒号が鼓膜に響いたのか、いつものようにビツクリした様子で目覚めたルドルフは、眠気眼をしょぼしょぼとさせながら藁のベッドへと歩いていく。

いつもと違った空気を毛で覆われた肌で感じたのだろうか、トナカイはゆっくりと覚醒し主人に目を向ける。彼の顔を見た瞬間、その怒りの度合いを瞬時に理解したルドルフは、涙目になって後退る。

「てめえな、手紙読んどけって言っただろうが!」

主人の言葉を聞いたトナカイは、その怒りが自分が手紙を読んでいるという事に対して向けられていることに気付き、ふふんと鼻を鳴らしてゆっくりと藁のベッドへと戻る。

「……おい、お前聞いてんのかよ」

「……………」

「なに? もう手紙なら読み終わっただと? でも袋空いてねえじやねえか」

主人に得意げな表情をし、手紙の袋を見やるとルドルフは再度鼻を鳴らす。

「さつさとメモ帳取ってこいだと? トナカイのクセに生意気な……
…本当に終わったんだな?」

念を押して再度彼が訊ねると、ルドルフは大きく頭を上下させ頷いた。

「まったく、去年は散らかしたまんまだったから、まだやってねえのかと思っちまっただろうが。紛らわしいことすんな、このアホトナカイ！」

「ッ！！」

アホと罵られたルドルフは頭にきたのか、その場ですつくと立ち上がると、主人に向かってファイティングポーズをとった。

「な、なんだよ。ケーキがどうなってもいいのか？」

あまりの迫力に一瞬たじろいだものの、サンタは自分の手中にルドルフの好物があるのを逆手に取り、強気の攻勢に出た。

すると彼が抱えている白い箱の中身を知ったルドルフの態度が一変する。戦闘体勢を解きサンタへ駆け寄ると、ルドルフは彼に両足で抱きついて上目使いで見上げた。今にも泣き出しそうなルドルフを、呆れた顔で見下ろして彼は言った。

「分かった分かった。しょうがないからやるよ」

主人の言葉を聞いたルドルフは、彼から離れると早くくれ、と言わんばかりに立派な角を振り催促している。あまりの変わり身の早さにサンタは呆然とした。

「なんだよ、現金な奴だな」

呆れた様子で呟くと、ルドルフの目の前に箱を置き中を開ける。

持つて来る時に揺れたからだろう、ケーキは片方に寄り型崩れしていた。しかしショートケーキのイチゴは無事にその頂点に君臨しており、天を貫く勢いで存在を主張している。

しかしそのケーキの大きさに気が付いたルドルフは、不機嫌そうに主人を見返す。

「……………」

「大きさが違うだと？ き、気のせいだろ」

「……………」

「べ、別に間違えたわけじゃねえよ……嘘じゃねえって」

明らかに動揺しているサンタの様子に不信感を募らせるルドルフ。まさか自分にやる気を出させる為に嘘をついたのではないか。彼を見つめるルドルフの瞳は疑念に満ち満ちている。

「しょうがねえだろ、俺だって忙しかったんだからよ！」

忙しかった。その言い訳のセリフを何度も聞いてきたルドルフは、主人に大して不遜な態度を示す。地面に胡坐をかいて座り、腕を組み下からサンタを射抜くような視線で睨みつけた。これではどちらが主人か分らない。

「なんだよその態度は。分かった分かった、今度はちゃんと××注文してやるからよ、機嫌直せよ」

彼の適当過ぎる謝罪の言葉は、ルドルフを怒らせるのに丁度いい起爆剤となった。ルドルフは主人に対し大きな態度に出た。

「……………」

「なに？ 今年のクリスマスは俺一人でプレゼント配れだ？ ん

なこと出来るわけねえだろ！」

「……………」

「手紙を読んでないと疑った事を謝れ？ ……すまなかったな！」

「……………」

「ぶっ！！」

サンタはルドルフの放った言葉に思わず吹き出した。

「トリプルXLサイズのケーキで……手を打つ、だと」

ルドルフの要求を聞いた彼は怒りのあまり身体をわななかせている。

紛らわしい書き方だが、トリプルXLとは、“XLサイズを3つ分”という意味ではなく、そのXLサイズ3つ分の“3倍”、つまりはXLサイズの3乗サイズと言う意味だ。このLLサイズですら直径50cm、高さ20cmを超える大きさなのだ、トリプルXLなんてものはこの厩舎並みの高さになってしまうだろう。

「お前そのケーキいくらするか分かって言ってるのか……」
「……………」

ルドルフはさあ、と言った風に肩をすくめ首を傾げている。彼はルドルフの短絡的嗜好と、人を……いや主人を小馬鹿にしたような態度にととうとう堪忍袋の緒が切れた。

「てめえいい加減にしねえと氷河に埋めんど！」

「ッ！？ ………………」

ルドルフも立ち上がり負けじと主人に反論する。ルドルフが再びファイティングポーズをとると、サンタは一瞬ビクつき後退った。

「ちつ、分かったよ。しゃあねえ悪かったな。俺もお前のこと信頼してなかったせいもあるしな」。勝ってやるよ、ああ買ってやるさ」

ルドルフの本気に恐れをなしたのか、サンタは踵を返しルドルフへひらひらと手を振ると厩舎から出て行こうとする。ルドルフはそんな彼の態度が気に入らないのか、扉に手をかけたサンタの背中に思いっきりドロップキックを見舞った。

「んがつー！」

蹴られたサンタは勢いのまま顔で扉を押し開け、そのまま雪原に放り出され転がっていく。ルドルフはそんな主人を見て鼻で笑っている。彼が雪から顔を出した瞬間に、ルドルフはこれ以上の会話が億劫だと言わんばかりに首を横に振ると、厩舎の扉を閉めてサンタを拒絶する。

外に取り残されたサンタは怒りで顔を真っ赤にしていた。

「なんだあのウマシカトナカイは！ いい加減にし……ヘックション！ さつぶー！ こんなことしてる場合じゃなかった」

悔しさ半分、怒り半分。やり返したい気もするが、サンタにはやらねばならないことがある。恨めしそうに厩舎を一度見た彼は、中から聞こえるケーキを食べる音を背に、1人ハウスへと戻っていた。

家に戻ってからしばらく暖炉の前で暖をとっていたサンタだったが、時計をちらりと見ると憂鬱そうな顔をして手紙の置かれたテーブルへと戻っていく。そして手紙の内容をメモする作業を再開するのだった。

12月14〜22日

12月14日

思いのほか集中出来たサンタは、あれだけの数の手紙を……と言っても、ルドルフに比べれば断然少ないのだが、2週間も掛からずに読破することが出来た。ルドルフよりも少ない理由としては、彼がある妙案を思いつき、それを実行したことが挙げられる。

世界中のサンタクロース協会へ、『英語が分かる子供は出来るだけ英語で書いて欲しい』という手紙を送りつけ、告知のポスターなどにそれを書き添えてもらっていたからだ。

サンタクロース一族は世界中の言語を全て理解出来る能力を持つてはいるが、手紙を読み、更にはそれをメモするのは大変な作業だから昔からサンタクロースの相棒でもあるトナカイがその作業を手伝うことになっていた。

しかしルドルフは、昨年までドイツ語しか理解することが出来なかったため、サンタはルドルフを調教し、英語を叩き込むことを思いついた。

そうすれば英語で送られる手紙は毎年群を抜いて多かったため、少しでも楽が出来ると踏んだからだ。そんなことがルドルフに知れたら、きつと激怒どころでは済まない事は彼も重々承知している。

だからその事だけは自分だけの秘密だ。アンナに言おうものなら、きつと弱みを握られてあれやこれやと願望を要求されるに違いない。

目頭を押さえ、疲れた目のコリを解すようにマッサージュすると、サンタはすっかり綺麗になったテーブルの上を見て満足げに頷く。しかし床に視線をおろすと、今まで読んだ何億という手紙が未だ散乱したままだった。

とりあえず彼は、自分のメモした物とルドルフから聞きながら書いた物を合わせて、膨大な枚数となったメモ帳の束を持ち、家の外へと出て行った。

この2週間、家に籠りつきりだったサンタは、久しぶりの外の冷たい空気をめいっぱい吸い込んで、肺を自然の息吹で満たす。伸びをして深呼吸すると、彼は階段を下りていった。

そして巨大な電子パネルの前まで来るとそれを操作する。すると機械の下半分が大きく口を開け、液晶に『メモを入れてください』と表示された。

彼はメモを全て押し込むと、指示に従いパネルを操作する。鈍い可動音が鳴り、しばらく待つと、チンツ、という音と共に再び液晶に文字が表れた。『クリスマスプレゼントの注文を承りました』

「よし、これですばらくは暇になるな」

サンタは嬉しそうな笑みを浮かべると、足早に家へと帰って行く。注文した子供達へのプレゼントは、街外れにある工場で全て作られる事になっていた。毎年何かは、作れないから“外”で購入してきてくれと、逆に注文書を送りつけられることもあるが、半日経っても送られて来ないところを見ると、どうやら今年は大丈夫なようだ。

これからの1週間、今まで詰めの作業をしていたサンタは、その分羽を休めてのんびりと過ごした。そう、あの手紙が来るまでは…。

12月22日

クリスマスまであと3日と迫った今日。サンタはいつものように

玄関のドアを雑に開け、新聞紙を取りにポストまで歩いていった。するとふと目をやった電子パネルに「1」という数字が表示されているのに気付く。

「あれ、なんで入ってんだ？ もう受付はとっくに終わってんのに。……もしかして郵便のおっさん間違えて入れたのか？ めんどくせーな」

小さくため息を吐き、サンタはパネルを操作して蓋を開けた。たしかに箱の中には1通の真っ白な封筒が寂しく横たわっている。彼は更にパネルを操作すると、箱の床がせり上がって来た。やがて床は地面と水平になるまで持ち上がると自動で止まる。

床を歩いていくと封筒の前で足を止めた。そしてその封筒をおもむろに拾い上げ、表と裏を確認する。そのどちらにも差出人の名前と住所が表記されておらず、ただ『サンタさんへ』と書かれているだけだった。

彼は封筒を訝しげに見ると、一瞬血の気がサーツとひいた。

「ま、まさかふ、不幸の手紙とか？ ……んなわけねえか」

自分は感謝されても恨まれるような事は一切ないと、自らに言い聞かせ妙に納得し頷くと、サンタはポストから新聞を取り出し、封筒と共に家へと持って帰っていった。

リビングへと戻った彼は持っていた新聞を円卓に投げ捨て、ソファーに座ると封筒の口を破り中を開ける。

すると中から出てきたのは、安そうで何の飾り気もない2つ折りの紙だった。中を開くと所々汚れており、その内容を読んだサンタは言葉を失った。

その手紙には「パパをください」と書かれていたからだ。

「……パパ？　パパって何だ。……おもちゃか？　もしかして民族的な何か、か？　……まさか……父親、のことじゃないよな？」

彼はしばらく足りない脳を振り絞り唸って考えてみたものの、パパと聞いて思い浮かぶものが1つしか心当たりがない事に気付いた。

「一体何考えてんだ、このガキンちょは？　えーっと住所住所……あれ、書いてない」

サンタは再度上から下から見返してみる。やはりどこにも書かれていない。閃き今度は裏を見ても、やはり表記されていない。

「何なんだよ、悪戯か？」

そう思いながら封筒を手にとると中から小さな紙切れが、舞い散る花弁のようにひらりと落ちた。それを拾い上げたサンタクロース。

「あ、書いてあった。つつか紛らわしいわ！」

書かれていたものを読み取ると、差出人はどうやら少女のようだ。名前はソフィー。住所はフランスのローレーヌ地方にあるドンレミ村。

「パパが欲しいって……どういうことだよ」

彼は少し自分の両親を思い出していた。すると突然、思い浮かんだイメージを払拭するように頭を振る。^{かぶり}

「あんな道楽な親はどうだっていいんだよ、問題はこっちだ」

そう言ってサンタは再び手紙を見つめる。改めて見たその文字が

らは、なんだか弱々しく心寂しい印象を受ける。彼はしばらく悩んだ後に決心した。

「じゃあねえ、一度偵察しに言ってみるか。この子がどんな子か」

ソファから立ち上がったサンタはクローゼットへ歩いていき、中からサンタのスーツ一式を取り出した。アンナの家へ弁当箱を届けに行つて以来、着ていないスーツの袖に腕を通す。クリーニングに出し、人型ハンガーに掛けたことでスーツはその機能を最大まで回復させていた。

着替え終わった彼はもう一着クローゼットから取り出す。スーツの上に羽織るカムフラージュ用の、ファアの付いた黒のコート。滅多に着ることのないそれは皺一つなく新品同様だった。

「さて、あいつは起きてつかない。まあ、寝てたら蹴り起こしてやるだけだなー」

コートを羽織ると彼は家を後にする。玄関の鍵を閉め、サンタクロースがいないことを知らせる為に、扉に『CLOSED』の掛札を掛ける。そして彼はルドルフのいる小屋へと歩いていった。

厩舎の前まで来ると、サンタは一度深呼吸をし中で寝ているであろうルドルフに1度声を掛ける。

「ルドルフー、仕事だぞー！」

結構大きな声を出したにもかかわらず、しばらくしてもルドルフの返事は聞こえてこない。彼はニヤリと不敵に笑うと、思いつきりそのドアを蹴り開けた。

まるで鉄砲でも撃ったかのようにバンッ、という音をたて開いた

扉の前には、ルドルフが機嫌の悪そうな顔をしながらファイティン
グポーズをして立ち構えていた。

驚いたサンタがバランスを崩し前のめりになったところへ、ルド
ルフのカウンターでストレートが飛んでくる。受け流すことも出来
ず、彼はそのパンチを顔面に受け、いつぞやのように雪原へと吹っ
飛ばされた。

積もった雪に出来た人型のシルエットの中から、サンタは顔を出
すと眉間を押さえながら言った。

「いてえな、クソトナカイ！ 蹄鉄で殴んたっていつも言ってる
ろー！」

「……」

ルドルフは肩をすくめ主人を馬鹿にしたような顔をし、しっしつ
と蹄を振ると小屋の扉を閉める。彼はその態度に激怒したが、それ
をなんとか堪え扉越しにいるルドルフに諭すように話しかけた。

「ルドルフくん……ぐっ……ダブル、Xのケーキは、如何かな
？」

そう言うサンタの顔は引きつっている。物でしか釣れない自分の
未熟さと、主人を主人とも思っていないトナカイに苛立ちを感じな
がらも、結局トナカイに頼らなければサンタクロースは何も出来な
い事が自分自身情けなかったのだ。

中でごそごそ音がしたかと思ったら、急に扉は開けられた。ルド
ルフが出てきたのだ。しかもハーネスを取り付けソリと繋いだ状態
で、ソリを引きずってきた。

そしてルドルフは雪原に足を踏み入れる。しかしトナカイの脚が
雪に沈むことはなく、ソリもまた同じだった。サンタを横目でちら
りと見ると、ルドルフは鼻を鳴らし角を振る。どうやら早く乗れと

彼に言っているようだ。

サンタはゆつくりと立ち上がると、ルドルフに声を掛ける。

「まったくよ、てめえはいつも素直じゃねえな」

そう呟いて彼はソリに乗り、ルドルフに掛けられたハーネス、そこから伸びる手綱をしっかりと握り締めた。

「ルドルフ、フランスのドンレミまで飛んでくれ」

「……………」

サンタの言葉に頷くと、ルドルフは雪を蹴り走り始めた。まるで普通の地面のように、雪の上を滑走するトナカイ。ある程度の距離を走ると、ルドルフの身体が宙に浮き始める。そして繋がれたソリも同じように宙に上がると、ルドルフはサンタクロースをソリに乗せ、空へと飛んでいった。

サンタが住むグリーンランドから、少女が住んでいるフランスのドンレミ村まではおよそ3,500km。ルドルフは歴代のサンタクロースのトナカイの中でも屈指の馬力を誇る。そのため、30分かからずにドンレミ村へ到着することが出来た。

サンタは人に見つからないよう警戒しながら、村から少し外れた森の中へルドルフを下ろす。スーツの上にコートを羽織ると、彼はトナカイに声を掛けた。

「ここで大人しくしてろよ」

「……………」

ルドルフは主人の言葉に頷くと、立派な角で森の木に攻撃を仕掛ける。ゴスッゴスッと鈍い音をたてて木の皮が剥がれていく。ルドルフには、木を見るとその皮を剥がしたくなる妙な癖があり、それ

を見たサンタは頭を押さえ、呆れた表情でその場を離れた。

やがて森を抜けると、小さな村が見えてきた。ドンレミ村だ。入口を入ってすぐ見えてきたのはジャンヌ・ダルクの生家とされる家で、石造りの2階建てで外観はとても質素なものだった。

「ジャンヌ・ダルクか……」

サンタは感慨深げにその地味な建物を見つめている。

ジャンヌは「オルレアン乙女」とも呼ばれるフランスの国民的英雄だ。カトリックでは列聖され、聖人となっている。

初代サンタクロースである聖ニコラウスも、ジャンヌと同じく聖人に列聖されている人物だ。

サンタは小さな頃から聖書を読まされた。小さかった頃は、祖父である前サンタクロースが読み聞かせたりしていた。まるで絵本のように。

だからキリスト教に関する知識が並みの人間以上には備わっている。

自分にも聖人の血が流れている、そのことが少し不思議な感覚なのだろう。彼はジャンヌの家をボーッと見つめている。

12月22 (2) 23日

すると突然、村の教会の鐘が鳴らされた。その音にハツとして気付いたサンタは、現実引き戻されたのを感じる。

「そうだった、手紙の住所を探さなきゃな」

これからミサでも始まるのだろうか。

狭い村に建つ数十戸しかない家々から、人々が次々に出てきた。彼はそんな中1人の女性に声をかける。

「あ、ちよつと悪いんだが、この住所を覚えてくれないか？」

封筒の中に入っていた、住所の書かれた小さな紙切れをポケットから取り出し女性に見せる。

女性は「ああ」と言つて村の向こうを指差し、丁寧に道順を教えてくれた。

どうやらドンレミ村の奥にある小さな孤児院らしい、と言つことが今の説明により判明した。

「孤児院？」

サンタは女性に礼を言うと、その孤児院を目指して歩き始める。道中、ほぼ一本道のような道のりを歩き、やがて見えてきたのは小さな教会だった。

ここドンレミ村にはいくつか教会があるが、そんな中でも一際小さい教会だ。屋根の上には、これもまた小さな十字架が申し訳程度に聳え、扉の上方にも十字のレリーフが施されている。

そして教会の横からは長方形の別の建物らしきものが生えるように突き出していた。

そちらへ近寄ってみると、『天使たちの家』と書かれている看板が彼の目に映った。どうやらここがあの手紙を送った少女の家らしい。

彼は辺りを見渡すが、人の姿がない事に気付いた。

先ほどの鐘の音はミサを知らせるものだったはずだ。この教会はそれに使われていないのか、そう思いサンタはまず教会に足を踏み入れた。

中は外観通り本当に狭く、備え付けられた長椅子も全部で10席しかなかった。通路の幅も狭く、ただ祈りの為だけに作られた簡素な教会であることは否定のしようがない。

教会の中央奥には、台の上にキリスト像が置かれ、更にその奥の窓には小さいながらも聖母子像のイコンが綺麗なステンドグラスで嵌め込まれている。

そこから降り注ぐ色を帯びた光のシャワーは、飾り気のないシンブルで寂しい空間に、ほんの少しの荘厳さを称えていた。

彼はその光を切なげに見つめている。

すると突然、奥の関係者用出入口らしき扉が開かれ、若い綺麗な女性が教会内へと入ってきた。

「あら？」

黒の修道服に身を包み、頭にベールを被ったシスターは、サンタの姿を見つけ声を掛けた。

「どうなさいましたか？」

「え、あーいや、えっと……」

ボーっとしていた彼は急に声を掛けられたことへの対応に戸惑っている、シスターはそれを尻目に、手に持った花を花瓶に生けていく。

それは純白のバラだった。

手際よく花を入れ替えたシスターは、枯れかけのバラを持ちサンタの方へと歩いていく。

「お祈り、ですか？」

「いや、違うんだ。ちょっと聞きたいんだが、あんたはこの孤児院の人か？」

「え？ はい、そうですけど」

サンタに質問されたシスターは不思議そうな顔をした。彼は構わず話を続ける。

「このソフィーって子はこの孤児院にいるんだろ？」

そう言っただけ彼はコートのポケットから封筒を取り出し、シスターに手渡した。彼女はそれを受け取ると驚いた様子で、男に問いかける。

「どうしてあなたが持つてるんですか？ これはサンタさんに送ったはずなのに」

彼を見るシスターの目付きが、あからさまに不審者を見るようなものへと変わった。

「あんた頭おかしいのか？ 俺はサンタクロースだ、この格好見ても分かんねえのかよ。だから持つてんだろ」

無然とした態度で彼女の目を見つめながらそう言うと、シスターは少し照れた様子で一歩前へ歩み寄り、顔を赤くしながら頷いた。

「そ、そうですね、あなたはサンタクロースです」

「おいおい、そんな簡単に信じていいのかよ。まあ信じてもらえないよりはマシだけだな。……大丈夫かいっ」

サンタは少し心配になりながらも、ずいずいと迫り来るシスターを両手で引き離し、長椅子に腰掛ける。

「ところでサンタさんがこんな所になんのご用ですか？ まだクリスマスまで3日もあるのに……あ、もしかして日付を間違えちゃったとか？ 案外ドジなんですね」

「おい、勝手に納得してんじゃねえよ。別に間違えてなんかねえつつつの」

「でしたら……」

自分の予想が外れたことを残念に思ったのか、シスターは拗ねた様子で彼を見返した。

「この手紙、あんたは読んだのか？」

「？ いいえ。私はポストに手紙を投函しただけですけど？」

「なら読んでみるよ」

そう言っただけで彼は半分に折られた手紙をシスターに手渡した。

彼女はそれを受け取ると開いて中を読む。一瞬で読み終わるとサンタに視線を戻し、どこか悲しそうな顔をした。

「その意味っていうか、その子が一体何を考えてるのかちょっと気

「なってな」

「そう、ですか」

「世界から集まった手紙の中でそんなこと書いてたのはこの子だけだったんだ。今まで6年間サンタやってきたけど、そんなこと書かれたのも初めてだしな……だから、どいう子か気になったんだ」

シスターは俯き目を閉じた。ややあつて重い瞼を開けると、「あの子は、孤児です」と口火を切り、ぼつりぼつりと話し始める。

彼はその内容を聞いて理解した。少女がなぜあんな事を書いたのか――。

少女が生まれて直ぐに、母親は病で亡くなったそう。亡き妻に代わり、父親が少女を育てた。愛する妻との間にもうけた1人娘。父は娘にこの上ない愛情を注いだ。そんな父親の事が、少女は大好きだった。しかし不幸は突然舞い降りた。

その日は少女の誕生日だった。

父親は街で大きなぬいぐるみのプレゼントを買って家へと帰る途中、車に轢かれ不慮の事故によりこの世を去ってしまう。大好きだった父の死、少女は知らせを聞いて悲しんだ。届けられた猫のぬいぐるみを抱き、大粒の涙が床を濡らす。

翌日、葬儀が終わった後、少女には頼れる身寄りもないことに気付いた村人は、この孤児院に預けることにしたそう。明るかった少女はそれ以来、誰とも笑わなくなり無口になってしまったらしい。この孤児院には他にも何人か子供がいたようだ。

みんな里親に貰われ養子となったそうだが、少女だけは頑なにそれを拒み続けていると言う。

話を終えたシスターの目からは涙が零れ落ちた。すすり泣く声が、狭い教会内に響く。

「なるほど、そういうことか。……よし、俺に任せろ！」

サンタは立ち上がり、椅子に座って泣いているシスターの頭を優しく撫でると、そのまま教会を出て行こうとする。

「あ、あの、ソフィーに会っていかないんですか？」

シスターは鼻をすすりながら彼の背に向かって問いかけると、サンタは立ち止まり彼女に振り向き呆れた顔をした。

「あんた、頭おかしいのか？　こんなところでサンタクロースの正体ばらしてどうすんだよ。サプライズになんねえじゃねえか。まあ驚きはするかもしれないけど、サンタのプレゼントはクリスマスまで、相場が決まってるんだよ」

そう言って笑う彼の瞳はキラキラと輝いていた。まるで無邪気な子供のように。

シスターにさよならを告げると、真っ赤なスーツは教会を後にした。

ドンレミ村を出て森へ入ったサンタは、ソリを置いてきた場所へと走って戻る。

「あれ？　えっと、確かこの辺に……っ！？」

周辺を見渡したサンタはその光景に驚愕した。

見渡せる範囲にある木の幹が、地面から約1m程の所まで皮を全て剥がされていたからだ。むき出しになった木の表面には、猛獣の爪痕のような、それにしても太すぎる傷跡が無数に残されていた。

「あの馬鹿はなにやってんだ！」

サンタはまだこの周辺にいるであろうルドルフを急いで探した。
探し始めておよそ5分。

思ったよりもルドルフが遠くへ行つてなかったことにひと安心した彼は、木の根元に角を突き刺したまま器用に眠るルドルフを叩き起こした。

「このクソトナカイ！ さっさと起きろ！」
「ッ！？」

いつものように目覚め、眠気眼をサンタへ向けるとルドルフはシユピツと敬礼をし、立派な角で主人をすくい上げるとソリに放り込んだ。

そして滑走を始め森を一気に駆け抜ける。森を抜けると同時にルドルフは宙に浮き、ダブルXLサイズのケーキが待っていると思い込み、サンタのログハウスへと急いで帰るのだった――。

途中、ルドルフの気合が何故入ったのかを彼は察し、家にダブルXLなんてケーキがないことを思い出すと、スーツとコートをクリーニングに出すということを口実に街へ行き『No?1』へと立ち寄った。

予約でないにもかかわらず、アンナを始め店の従業員たちは嫌な顔一つせず、笑ってオーダーを聞き入れてくれた。珍しく彼は何度も頭を下げて礼を言う。

そして4mにもなるケーキ箱をソリに乗せると自身も座り、店の人たちに手を振り家へと帰っていった。

雪原のログハウスへと戻ったサンタは、興奮したように角を振り回すルドルフを小屋へ押し込み、ケーキの箱を地面に置いてやる。目の前で開かれる箱を血走った目で見つめ、ケーキが露になると同

時にルドルフはケーキにがつついた。

疲れた表情でそれを見届けると、彼は厩舎を後にし、ハウスへと帰った。

——翌日。

街のクリーニング屋から戻ったサンタは、袋からスーツ一式とコートを出し、それを早速人型のハンガーに掛ける。このスーツは充電式で、付属の人型ハンガーでなければ充電することが出来ない。

スーツの主な機能としては温度調節がある。サンタクロースは世界を飛び回る者。

極寒の地からはたまた酷暑の地。その為スーツには特殊な技術で備え付けられた温度調節機能が付いているのだ。しかもコスチュームの頭から足、全てが揃っていないとその効果を発揮しない。

万が一、帽子が飛ばされでもしたら大変なことになる。

彼はクローゼットを閉めると、残り1日と少しの時間、のんびりと過ごすのだった。

12月24日〜25日

12月4日 午後3時。

今日はクリスマス・イヴ。街の工場からサンタクロースの家へと、ようやくプレゼント袋が届けられた。

1m程の白く大きな袋の中に、子供達へのプレゼントが沢山詰め込まれている。袋が開かないように口を縛っているバンドには、これにもまた電子プレートといくつかのスイッチが付いてた。

サンタは宅配業者から納入書を受け取るとそれを確認する。そして受領書にサインを記すと、家の中へと戻っていった。

プレゼント袋をリビングのソファアに下ろすと、彼は明日の準備に取り掛かる。

まずクローゼットを開け、スーツの充電が完了しているかを確認し扉を閉める。そして一旦自室に戻り、部屋の机の上から砂時計を手にとると、引き出しから懐中時計を取り出す。そしてまたリビングへと戻った。それら2つをラウンドテーブルに置くと今度は玄関へ。

彼はシューズボックスから黒のサンタ靴を出すとそれを磨く。あまり汚れてはいなかったが、磨き上げたことで少しだけ輝きが増したように思える。

とりあえず今日やることを終えたサンタは夜中まで少し仮眠を取るため、リビングに敷かれた簡易ベッドで休むことにした。

それから8時間後。

12月25日 午前1時26分。

目が覚めたサンタは上半身を起こし壁に掛けられた時計を見やる。

「ん？ …… うおっ！ もうこんな時間か。寝坊しちゃったぞ」

既に日付が変わってしまっていることに気付いたサンタは、急いでスーツに着替えようと跳ね起きクローゼットの前へ。扉を引き開けハンガーを取り外すとパジャマを雑に脱ぎ捨て、黒のインナー、靴下、スラックス、スーツ、そして帽子と順序良く着替えていった。そしてキッチンへ歩いていくと、冷蔵庫から普通サイズのケーキの箱を取り出し、中に入っていたSサイズのホールケーキを食べる。紅茶の缶ジュースで口を潤すと、サンタは円卓から懐中時計と砂時計を手に取りスーツのポケットへ入れる。そしてソファアールからプレゼント袋を引き上げ肩に担ぐと、彼はリビングを出て玄関へと向かった。サンタ靴をシューズボックスから出すとそれを放り、スリッパをブーツに履きかえる。

ようやく準備の整ったサンタクロースは家を出て鍵をかけると、
ルドルフの待つ厩舎へと急いで向かう。

小屋へやってくると同時に、サンタは扉を蹴り開けた。中にいたルドルフは藁の上でまだ寝ており、鼻ちようちんを膨らませていることから、その熟睡加減が窺える。

彼は壁に掛けられたハーネスを持つとルドルフに近寄り、角を引き上げて無理やり上体を起こさせる。そして手際よくハーネスをルドルフの体に装着しソリに繋いだサンタは、トナカイの耳元で大きな声を張り上げた。

「ルドルフ！ いい加減に起きろー！！」

鼓膜が破れそうになるほど耳の中でこだまする主人の声に、ルドルフは気付き飛び起きる。まだ完全に覚醒していないのか、ルドルフの瞳は一点だけを見つめボーっとしていた。

「馬鹿やろう！！ もう1時過ぎてんだよ！ 早く用意しやがれっ
！」

そう言つてサンタはルドルフの鼻にデコピンすると、驚いたルドルフは急に駆け出しソリを引き、厩舎の外へと出て行つた。危うくそれに轢かれそうになったサンタは胸を撫で下ろし、無事だったことに安堵する。

頭を振り眠気を覚ますルドルフに、サンタは歩み寄ると背中をポンツと叩き声を掛けた。

「ルドルフ、今夜で今年の仕事も終わりだ。大変だけど頑張ろうぜ
！」
「……………」

主人の言葉にルドルフも頷き、角を上下に振ると意気込みを見せる。そして彼はソリに乗り、後部座席にプレゼント袋を置くと手綱を握つた。サンタクロースになってから6度目のクリスマス。

一度目を閉じ、そしてカツと見開くと、彼は手綱を引いてルドルフに合図をする。

雪の上を滑るように滑走するルドルフの体が宙に浮くと、サンタは更に手綱を引いた。すると完全にソリも浮き上がり、プレゼントを子供達へと届けるべく、雪の舞う真冬の夜空へと飛んでいくのだつた。

見下ろす街の明りも小さくなり、高空をソリで移動するサンタはスーツの左ポケットから懐中時計を取り出した。時刻は2時を回つたところだ。時間を確認したサンタは時計をしまつと、次は反対のポケットから砂時計を取り出した。そしてそれを逆さにした瞬間、世界の空間を覆うように七色の虹のようなものが出現する。

クリスマスの夜は長い。それはこのサンタの魔法のせいだ。サンタが取り出したこの砂時計。これは時の流れを緩める事の出来る魔法のアイテムで、サンタクロースの七つ道具の1つだ。

世界中の子供達にプレゼントを配るため、さすがにまともに配ったのでは時間があまりにも足りなさ過ぎる。ということで、初期の頃のサンタクロースが、マーリンという名の謎の老人に頼んで作ってもらったそうだ。

サンタはその間に、世界の子供達の家へとプレゼントを配っていくのだが、ここにも便利アイテムが1つ。それはプレゼント袋で、この中に何億という膨大な数のプレゼントが入っているのだが、これはクリスマス・タウンで生み出された特殊な袋だ。どういう技術かは分からないが、袋に入れた時に、入れた物が小さくなるらしい。そして袋を縛っている黒のバンドに取り付けられた電子パネルに、住所と氏名が表示され、家の上空に來た時に、その家の子供へのプレゼントだけが袋から出せるようになってる。そのおかげでサンタクロースは家を間違えることもなく、スムーズにプレゼントを届けることが出来ると言うわけだ。

「なあルドルフ、なんでそんなに張り切ってたよ。いつもよりペー
ー速いんじゃないか？」

「……………」

サンタの言葉にルドルフは上機嫌に、でも意味深に鼻を鳴らした。ルドルフの脚はもの凄い速さで空を蹴っている。3時の時点でもうプレゼントは残り半分を切っていた。そしてルドルフはちらりとサンタを見返すと言った。

「……………」

「なに？ トリプルXのケーキが待ってるから、だと？ ……っ

たく、しょうがねえ奴だなー。でもまあ、お前がいなけりやこの仕事も成りたたねえからな。そこだけは感謝してるんだぜ？　ありがとうよ、ルドルフ」

「……」

「柄にないだと。ふん、うるせえよ。残り半分切った。いくぞ、ルドルフ！」

サンタは手綱を強く握り締めるとルドルフへ合図を送った。命令を受けたトナカイは、更に足の回転速度を増してゆく。その軌跡には、まるで星を鑲めた様にキラキラと輝くラインが引かれた。

——午前4時過ぎ。

サンタは、手紙の送られてきた世界中の子供達へのプレゼントを全て届け終えた。たった1人を残して。

砂時計はまだほんの少しだけ落ちずに残っていたが、彼はそれを再びひっくり返すと、ゆっくりだった時の流れを自然に還す。

「ルドルフ、最後だぞ。ドンレミの孤児院だ」

「……」

いつになくまじめな顔をして頷いたルドルフは、ソフィーの待つドンレミ村の孤児院を目指し、主人を乗せて急いで向かうのだった。フランス上空には厚い雲がかかり、雪が静かに降っている。フランス東部のローレーヌ地方にあるドンレミ村は、雪化粧され一面真っ白になっていた。

サンタは孤児院の裏手にある庭にルドルフを下ろすと、何も入っていない袋を持って孤児院へと向かった。

シスターでもいるのだろうか。教会から揺らめくように蝋燭らしき光が漏れているのに気付いた彼は、一先ず教会の方へと顔を出す

ことにした。

他の教会に比べ、相変わらずチープな造りの扉を押し開けて中に入ったサンタは、狭い教会内を見回す。するとそこには誰もおらず、ただ蝋燭が灯されているだけだった。

彼は蝋燭の明りに吸い寄せられるように、一步を踏み出そうとしたその時、ドンツと何かにぶつかった。

「ん？」

サンタは下を見ると、一人の少女と目が合った。寝癖の付いた茶色のロングヘアに、ブルーグレーの瞳をした小柄な少女は男をジッと見つめている。その瞳は暗く冷たい印象を受ける。

生きてはいるがまるで死んでいるかのようなその瞳と、しばらくサンタは見つめ合っていたが、こんな時間に子供が起きているとは思ってなかった彼は驚きのあまり大きく仰け反った。

「うおっ！……な、なんで起きてんだ……。今何時だよ」

サンタはポケットから懐中時計を取り出すと時刻を読む。現在4時30分。

「あ、もしかして、お前があの手紙を書いた子か？」

「……」

少女はサンタの言葉に頷いた。瞳は彼を捉えたまま動こうとしない。

「名前はソフィー、だよな？」

「……」

サンタの問いに、再び少女は頷いた。言葉を発しないことに少し訝しがりながらも、彼は続けた。

「シスターはどうした？　もしかしてお前1人か？」

「……シスターなら、まだ寝てる。……それよりも、あなた誰？」

「そうか、あの姉ちゃんはまだ寝てんのか……って、え？」

彼は啞然として少女を見返す。相変わらず熱を感じさせない冷たい瞳がサンタを見つめている。

「お前この格好見ても分かんないのか？　俺はサンタだよ」

「……嘘、だっておじいさんじゃない」

「じいさんはもう死んだよ。だから変わりに俺がサンタクロースやってんだ。俺は本物のサンタさんだぞ？」

ソフィーは変わらぬ視線を彼へ投げかける。正体を名乗っても反応なく信じてもらえず、サンタは頭をポリポリと掻いて悩んでいる。

「どうすりや信じてくれるんだよ、まったくこっちの人間はいつもこいつも……あ、そうだ。なあ、何でサンタクロースは鍵を持つてないのに、勝手に人ん家に入れると思う？」

「……知らない」

「なんだよ、つまんねえ子供だな。まあいいか」

そう言っ得意げな表情をソフィーに見せると、彼は懷から一枚の布を取り出して広げる。それは何の変哲もないマントで、黒の刺繍で縁取られた白い生地真ん中には赤の十字が描かれていた。

「こいつを身に付けると――」

「――あっ!？」

少女が始めて人間らしい感動の声を漏らした。
彼がマントを着用したその瞬間、その姿が教会内から、そしてソ
フィーの目の前から瞬時に消えたからだ。
姿の見えない男の声が教会内に響く。

「こいつは透明マントつつてな、着用すると姿が消えるんだ。し
かも障害物をすり抜けることが出来る。初期の頃のサンタクロース
が、魔術師マーリンとか言う胡散臭いおっさんから貰ったんだとよ」
マントを脱ぐと、サンタの姿が現れる。

「あのアーサー王も使ったって代物だ」

サンタは白い歯を溢してそう言つと、少女の顔にほんの少しだけ
嬉しさが滲み出たような気がした。

「……あれ？ 反応薄いな。……ならとっておきだ、サンタのトナ
カイ見せてやるよ」

「トナカイ？」

「ああ。まあ多分女の子だからな、あいつはお前に喧嘩売ったりし
ねえから安心しろ」

「喧嘩……」

「あ、その格好じゃ寒いだろ？ こいつ羽織ってけ」

黒の修道服に手織りの手袋と靴という、いかにも寒そうな格好の
ソフィーに彼はコートを着せた。180cm用のコートとあって子
供には合っておらず、その大きさに裾は地面に垂れて擦っている。

「よし、行こうか。ここの裏だからすぐだぜ。ほれ、おんぶしてや

るよ」

彼はソフィーに背を向けてしゃがむと、少女は少し戸惑いの表情を浮かべたものの、嬉しそうにその背中にしがみ付いた。立ち上がり少女を背負ったサンタは、教会を出て裏庭へと歩いていった。

「ほら、あれが俺のトナカイだ」

裏庭へやってくると、ソフィーはサンタの顔の横から好奇心旺盛な瞳を輝かせて前方を見る。

そこには、絵本で見るとような立派な角を持った、サンタクロースのトナカイが静かに佇んでいた。彼はソフィーを地面に下ろすと、少女は恐る恐るルドルフに近付いていく。

「そんなに恐がらなくても大丈夫だぞ？ そいつは女の子には優しいからな。なっ、ルドルフ？」

「……ルドルフ……」

ソフィーは彼に振り返ると、触ってもいいかと目で訴えかける。サンタは小さく頷くと、それを確認した少女はルドルフにゆっくりと近付いていった。そして手を差し出し、トナカイの頭を撫でる。触れたことのない滑らかな上質の毛皮のような手触りに、ソフィーは大層驚いているようだ。その手触りが心地よかつたのか、少女はとうとうルドルフを抱きしめ長く分厚い毛に顔を埋める。

「俺がサンタクロースだって、信じてもらえたか？」

「……うん」

ソフィーはルドルフに抱きつきながら頷いた。

「それで、ソフィーが書いたあれなんだけど……俺は神様でもな
んでもないんだ。さすがにパパは無理だ、悪い」
「……」

サンタクロースの言葉を聞いたソフィーは悲しそうに目を伏せた。
その様子を見て少し心が痛んだが、彼は続ける。

「だからな、今日俺が、一日だけパパになってやる」
「っ!？」

思いもよらなかった言葉に目を見開いたソフィー。彼は笑顔を向
けると大きく頷く。ルドルフも喉を鳴らして鳴き、頭を上下に揺さ
ぶった。

「ソフィーが親父さんとしたかったこと、行きたかった場所、何で
も言ってみるといい」

「本当？」

「ああ、その為に俺は今日ここに来たんだ」

「……」

少女はしばらく悩んだ後、思い浮かんだことを全てサンタに話し
た。

一緒に食事がしたい。遊びたい。ドライブに行きたい。

特別なことは何もなかった。それは、父という存在とずっと一緒
にいたかった。ただそれだけなのだ。

「ソフィーは親父さんが好きか？」

「……うん」

「そうか」

「サンタさんは？」

「俺か？ うゝん、あんな親ならいつでもソフィーにあげたいくらいだ」

サンタは両親を思い出し、頭を押さえて首を振る。そんな彼をソフィーは首を傾げて見つめている。暗く冷たい印象しか受けなかったブルーグレーの瞳は、今は光を灯し明るく輝いていた。

「親父は、俺が１８の時にお袋と家を出てった。その年の春、じいさんが死んじまってさ。サンタクロースを継ぐの継がないの話が持ち上がったんだ。もちろん俺は親父が継ぐもんだと思ってたからな色々安心してたんだが……。親父の奴“サンタクロースは面倒くさいからお前に任せる”とか言っつて、お袋と２人して出てっちまったんだよ」

「そうなの」

「まあ今はどこで何してるのか——っつて、ああ、そう言えば先月手紙が来てたな。たしか今はオーストラリアでカンガルーと遊んでるっつって、ご丁寧に写真まで付けてきやがったよ」

彼は呆れ顔でソフィーに話した。少女はそれを笑って聞いている。ようやく年相応の女の子らしさが出てきたと、サンタは少し安心した。

するとソフィーは突然悲しげな表情をして彼に問いかけた。

「おじいちゃん、死んだの？」

「ん？ ああ。寿命がきたって、笑って死んでいったよ。……きつとソフィーたちが想像してるサンタクロースってのは、じいさんみたいなのを言うんだろ？ 前にサンタクロースの絵が描かれたポスター見たことあるけど、じいさんそっくりだったしな」

「会ってみたかった」

「まあ寿命だから仕方がないさ。歴代のサンタクロースの中でも、

じいさんは取り分けクソ真面目なサンタだったと思う。来た手紙全てに返事書いてたからな。サンタクロースとしては見習わなきゃならないんだろうけど、俺には無理だな。……さて、時間もなくなるし、そろそろ飯でも食うか！」

そうしてサンタの『一日だけソフィーのお父さん計画』が始まった。

朝食をシスターと3人で食べ終わった2人は、シスターも交えて外で雪合戦をした。途中ルドルフも乱入し、ルドルフのおかげでサンタは雪だるまの中に埋められる羽目になった。ソフィーは今までにないくらいの笑顔で遊びを楽しんでいた。

それから次はドライブだ。しかしサンタは車の免許を持っていないため、車でのドライブは出来ない。その代わりに、彼はソフィーをソリに乗せることを思いつく。ソフィーも初めて乗るトナカイが引くソリに乗り、空中遊泳を心から楽しんだ。

夢のようなひと時に、ソフィーは時間も忘れてはしゃいだ。こんなソフィーを見たのは初めてだと、シスターも驚き、そしてサンタに感謝している。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、別れの時間が迫ることへソフィーは焦りと切なさを募らせる。最初は笑顔だったその表情は、時間が無くなると共に悲しげに変化していった。

そうして過ぎた1日。もう辺りはすっかり暗く、ドンレミ村のあちこちに人口の明りが灯る。

サンタは孤児院の裏庭に今朝と同様、ルドルフを下ろすとソリから降り、ソフィーに手を差し伸べた。しかし少女は俯いたまま彼の手を取ろうとしない。

「どうした？」

サンタが声を掛けるもののソフィーは何も反応を示さない。それからややあって、ソフィーは彼の手を取って立ち上がりソリを降りる。

「さあ、帰ろうか」

彼がその小さな手を握り、ソフィーをシスターの待つ孤児院に送り届けようと足を踏み出した時、ソフィーはその場に踏みとどまった。

サンタは振り返り少女を見下ろす。するとソフィーは顔を上げた。その瞳は涙で溢れ、目じりから零れ落ちて頬を伝う。街灯の明りが射しキラキラと輝く濡れた瞳がサンタを見つめる。そして言葉を口にした。

「……行かないで……」

小さな声だった。掠れてよく聞き取れない程に。でも、それが少女の、精一杯の最後の願いだった。アリが鳴くようなその声を、サンタはしっかりと耳で、そして心で聴いた。出来ればもう少し傍に居てやりたい。彼はそう思った。しかしけじめは付けなくてはならない。

彼はその場でしゃがみ込み、ソフィーと視線を交わす。二つの冬の空のような灰色の瞳は、真っ直ぐサンタを見つめ返す。サンタは何も語らない。ただ、目の前の少女を見つめるだけ。そして、その小さな体を抱き寄せた。強く、でも優しく包み込む。

声を上げて泣くのを我慢していたのだろう。彼の粗野で乱暴そうな容姿に違^{たが}わず不器用で、でも温かい抱擁に包まれ優しさに触れたソフィーは、まるでダムが決壊したように号泣した。瞳から零れ落

ちた大粒の涙が雪に落ちて溶ける。まるで少女の悲しみを雪が受け止めるかのように。

するとサンタの後ろで扉が開く音が聞こえた。ソフィーの泣き声を聞き付け、シスターが外へ出てきたのだ。2人の姿を見た彼女は胸を押さえて切なげな表情を浮かべる。

しばらくの間ずっと泣いていたソフィーだったが、朝から通して遊んでいたからか、サンタに身体を預けたままいつの間にか眠っていた。

彼は優しくソフィーの頭を撫でるとそっと抱きかかえ、孤児院の入口で立って泣いているシスターの元へと歩いていく。2人は孤児院の中に入りソフィーを質素なパイプベッドに寝かしつけると、サンタは寝ている少女に微笑み、ベッドの横にそっと置手紙を残して孤児院を去った。

『ソフィーの傍に居てやってくれ』そうシスターの見送りの申し出を断り、サンタはルドルフと共に灰色の空へと消えていく。

彼がドンレミ村を去ってから、ソフィーが目覚めたのは翌日の午前3時だった。シスターに声を掛けられソフィーは起き上がる。するとベッドに手紙が置かれているのに気付いた。

シスターは温かい微笑みを投げ掛け、少女はその手紙を手に取り封を切る。中から2つ折にされた手紙を取り出し開いたソフィーは、ドキドキしながら手紙の内容を読んだ。

そこには一言だけこう書かれていた。

——ソフィーへ

また来年のクリスマスに会おう。

一日だけのパパより――

ソフィーは手紙を読み終えると窓の外を眺める。まるで今日の日を祝福するように、空からは静かに、真っ白な雪が降り続いていた。

12月24日〜25日（後書き）

『ワイルドサンタ 〜一日だけの夢〜』をお読み下さりありがとうございます。
ございました。

ご注意としまして、現在ドンレミ村は「ドンレミ・ラ・ピュセル」
と名前を変えております。

この作品は夏に思い浮かんだものなのですが、季節じゃない為延び
延びになり、ようやく書くことが出来ました。

冬の寒い中、少しでも皆様の心が温まるような、そんな作品になっ
てくれていれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6357q/>

ワイルドサンタ ～ 聖夜の奇跡～

2011年11月15日08時16分発行